




ジャコバイト辞典(4)

浦田早苗

J

 **Jacobite Plot of 1722** — 1722年のジャコバイトクーデター計画：
Atterbury Plot, 1722を参照

 **Jacobite Plot of 1733** — 1733年のジャコバイトクーデター計画：
Cornbury Plot, 1733を参照

 **Jacobite Plot of 1737** — 1737年のジャコバイト陰謀計画
1736年にエディンバラで生じた、スコットランドの反イングランド感情が高揚したいわゆる「ポーチャス暴動(The Porteous Riots)」により、スコットランドのイングランドに対する怒りが極まったこの機をとらえ、グレンバケットのジョン・ゴードンは、スコットランド・ハイランド地方の多くのクラン(氏族)が反乱を起こす準備があることをフランスに伝え、その支援を打診した。しかし、フランスの重臣で英国との対立を望まないフルーリ卿の反対にあい、計画を断念せざるを得なかった。



ハイランダーの戦闘服

Jacobite Plot of 1742 — 1742年のジャコバイト陰謀計画

1740年に勃発したオーストリア継承戦争に関わりたくないウォルポールは、1741年9月ジョージ2世にハノーヴァーの中立を宣言する条約をフランスとの間に締結させ、ハノーヴァーの盟友であるドイツ諸邦からの大いなる反感をかった。かくしてウォルポールのリーダーシップは急速に衰えていき、同年行われた総選挙はウォルポール派の大敗であり、1741年12月に開催された新議会の内訳は、政府派ウィッグ 276、反ウォルポール派ウィッグ 124、トーリ 135にまでなった。こうした状況を見てジェームズ・エドワードは、英国のジャコバイト議員に、反ウォルポール勢力と結託してウォルポールの失脚に全力を尽くすよう命じた。1742年2月、チペナムの選挙結果に対する不服申立て請願が241対225で可決されると、命脈の尽きたことを悟ったウォルポールは大蔵卿を辞任したのである。



ウォルポールの風刺画

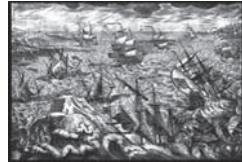
Jacobite Plot of 1744 — 1744年のジャコバイトクーデター計画


ルイ15世がスペインとの同盟を強化し対英戦の意向を固めていた1743年、ジェームズ・エドワードはクーデター成功の可能性が高いことをルイ15世に強く説いた。また英国内のジャコバイトからもフランス軍による進攻要請がなされたこと、及び、ロンドン守備隊が急遽召集の7,000名を加えた10,000名に過ぎないという情報もルイ15世を後押しし、ついにルイはスペインのフェリペ5世に英国におけるスチュアート朝の復活を告げ、その決意のほどを明らかにしたのである。1743年11月からフランスによる英国進攻作戦は、着々とその準備を整えていった。英国の英仏海峡守備艦隊に対抗する17隻の軍艦と4艘のフリゲート艦からなるフランス艦隊が出撃準備をし、また、サククス将軍旗下の10,000名の将兵がダンケルクに集結し、警護



Louis XV, by H. Rigaud

の手薄なエセックス州コルチェスター近郊マルドンに上陸する機会を窺うこととなった。ルイ 15 世はイングランド内のジャコバイトの蜂起を期待していたが、1744 年 2 月末準備がすべて整い計画実行の直前、ジェームズ・エドワードの長男チャールズ・エドワードがパリに姿を現したことを契機に、英国政府のイングランド・ジャコバイトへの監視が強化された。それに慌てたイングランドのジャコバイトはフランス政府に作戦実施時期の変更を求めたが、その逡巡がジャコバイトの命運に大きくのしかかることになる。その間発生した大嵐がダンケルク港に投錨していたフランス輸送船団を 2 昼夜にわたって襲い、嵐が去った後には英国進攻軍はもはや艦隊としての体をなしていなかったのである。




 **Jacobite Plot of 1747** — 1747 年のジャコバイト陰謀計画

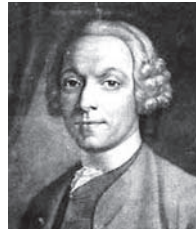
オーストリア継承戦争継続中の 1747 年、エリバンク卿の弟アレキサンダー・マリが提案した、エリバンク陰謀 (Elibank Plot) とも称されるジョージ 2 世誘拐計画。国王を誘拐し、その混乱のなかキース率いるフランス軍がスコットランドで蜂起するという計画であったが、準備半ばのうちにフランスと英国の和平交渉が始まり、この計画は一時断念された。



Alexander Murray

 **Jacobite Plot of 1753** — 1753 年のジャコバイト陰謀計画

1753 年、チャールズ・エドワードは Elibank Plot の再度の実行のため、スコットランド氏族の蜂起準備のため連絡役としてアーチボルト・キャメロンを英国に送り込むが、その情報はアリスティア・マクドネルから逐一政府に伝えられていた。英国に渡ったキャメロンは囚われて処刑された。



Archibolt Cameron



Jacobite Plot of 1759 — 1759年のジャコバイトクーデター計画

1759年、フランスの将軍で外務大臣のショワズール公爵は7年戦争の劣勢を覆そうと10万の将兵による英国侵攻を計画し、チャールズ・エドワードと会談を持った。しかし、チャールズ・エドワードは酷い二日酔いでこの会議に臨み公爵の信用を失う。これがジャコバイトにとって復権可能の最後のチャンスであったが、結局このショワズール公爵の計画は、キベロン湾の海戦、ラゴスの海戦によるフランス軍の大敗北によって立ち消えてしまった。



Bataille de Lagos, by Francis Swaine



Jacobite Rising of 1715 — 1715年のジャコバイトの乱

1715年、ジェームズ2世から5親等離れたジョージ1世の即位に反対する暴動が英国各地で発生した。この機をとらえ、フランスのルイ14世の全面的支援を受けたジェームズ2世の子ジェームズ・エドワードはスチュワート朝復活のクーデター計画を画策した。スコットランドでは、第6代マー伯爵ジョン・アスキング、イングランド西部では第2代オーモンド公爵ジェームズ・バトラーが、北部では、名うてのジャコバイト議員トマス・フォスターが、それぞれ蜂起の準備を進めることとなった。しかし、計画実行直前の1715年9月1日、ルイ14世が崩御し、フランスからの支援は断たれることになった。しかし、スコットランドでの勝利を確信していたマー伯爵は、業を煮やしてジェームズ・ドラ

四一九

モンドらと9月6日ブレマーにおいて挙兵してしまう。また10月6日、フォスターが、ワークウォースでこれに続き兵を挙げた。スチュアートの御旗を掲げたマー伯爵軍にスコットランド各地から兵が集まり、10月初めにはその数



Bremer Castle

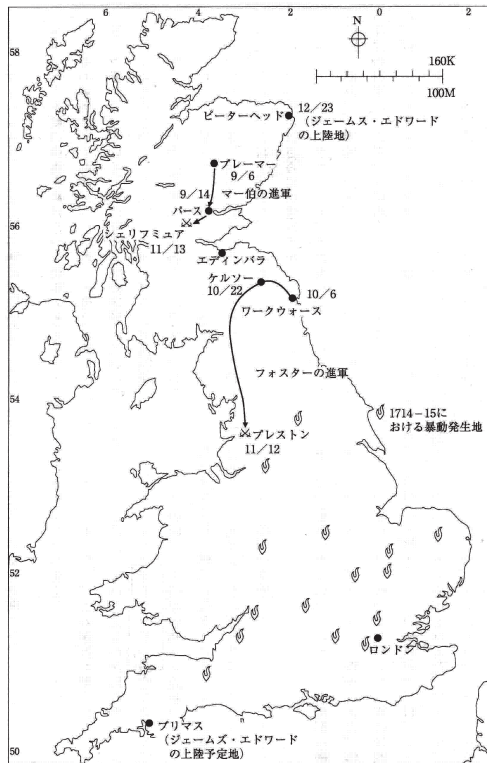
12,000 もの軍勢に膨れ上がっていた。一度は計画を断念したジェームズ・エドワードであったが、この報告を聞くと再び英国上陸を準備する。率いるはずのフランスの軍勢を欠いた時点で、最初の計画は破綻していたにもかかわらず、ジェームズは上陸地点を当初の計画通りイングランド南西部プリマスに定め、南西部蜂起の知らせをフランスのサンマロで待ち続けるのであった。この間、プレーマーから進撃したマー伯爵軍の動きも鈍かった。政府軍はこの時 3,300 の軍勢しか擁さず、マー伯爵軍の 4 分の 1 に過ぎなかったにもかかわらず、マー伯爵はパース陥落後軍の動きを止めてしまう。この時マーがそのまま一気に南下しエディンバラを陥せば、スコットランドは制圧されていたであろう。さらに、スコットランドとイングランドの境界に達していたフォスター軍と合流すればその勢いは倍増していたはずである。スコットランドのケルソーでマー伯爵軍を待ち続けていたフォスターは動き出さないマーに焦れ、イングランド南西部の蜂起を期待し無謀にも単独で軍を南下させ、11月12日ランカシャーのプレストンで政府軍と一戦を交えてしまった。死傷者は政府軍 76 に対しフォスター軍 42 と少数であったが、駆けつけた政府カーペンター軍に包囲されると、勝機を逸したと判断したフォスターは 1,500 名の兵とともに 11月14日に投降する。その前日の 13日、ようやくマー伯爵軍はパース近くのシェリフミアで政府軍と対戦したが、政府軍の死傷者 232 名に対し 663 名もの損害を出してしまう。彼の下にはまだ英気あふれる 12,000 の軍勢があったが、マーはこれ以上の犠牲を出すことを恐れ、それ以上の進軍をしなかった。マー伯爵がスコットランドを離れず政府軍に決戦を挑まなかった理由は、彼の予想をはるかに越える勢いで急激に兵が増加したため南下する際の補給線の確保が困難であり、また軍資金が尽き




*Battle of Sheriffmuir,
by John Wootton*

かけていたためでもあった。マーは、ジェームズ・エドワードと彼が持つスペインからの軍資金を、心底待ち望んでいたのである。ジェームズ・エドワードがイングランド南西部における蜂起の報告を諦め、スコットランドのピーターヘッドに上陸したのは12月23日のことであった。その後マーと合流するが、時はすでに遅く、給与どころか食料の配給も十分でなかったマー伯爵軍は解体しかけており、このときの兵数は最盛期の3分の1以下である5,000に満たないものとなっていた。しかし、それでもスペインからの軍資金が届けばジャコバイト軍は再び戦線を立て直すことができたであろうが、またしてもジャコバイトは不運に見舞われる。スペインの金貨を積んだ船がダンディの砂州で座礁したため、軍資金が届かなかったのである。

一方、政府軍司令官アーガイル公爵のもとにはイングランド、ネーデルラントから援軍が続々と到着し、1716年1月半ばには政府軍とジャコバイト軍の形成が全く逆転しており、アーガイル公爵はマー伯爵の3倍もの軍勢を手にしていたのである。2月4日、打つ手のなくなったジェームズ・エドワードは、マー伯爵と共にフランスに引き返すしかなかった。



1715年のジャコバイトの乱

 **Jacobite Rising of 1719** — 1719年のジャコバイトの乱

1718年8月、英国はユトレヒト体制維持のため仏、蘭、神聖ローマ帝国との間に4国同盟を締結し、1718年12月スペインに宣戦布告して交戦状態に入った。スペインは英国内に混乱を生じさせるため、アルベロニ枢機卿が中心となってジャコバイトの英国進攻を企てた。イングランドとスコットランドの2方面から進軍するこの計画では、イングランドをオーモンド公爵、スコットランドをジェームズ・キースが軍を率いること




Giulio Alberoni

ことになっていた。オーモンド公にはスペインが提供する5,000の歩兵と1,000の騎兵、大砲10門に15,000の銃器が、キースにはスペイン軍6個中隊と2,000の銃器が用意された。1719年3月、スペインのカディス港を出帆したオーモンド軍は、この季節としては異例な激しい嵐に遭遇してケープ・フィニステル沖で壊滅してしまう。一方、キース率いるスペイン軍はスコットランドに上陸し、ロッホ・アルシュ湖畔のイーリン・ドナン城に陣を張ることができた。しかし5月、3隻の政府軍艦による砲撃により、城は破壊される。残存のキース軍にキャメロン、マクレガー、マッケンジーといったハイランドの氏族から軍勢が駆けつけたが、軍勢が1,000

に満たないうちに政府軍と決戦を迎えてしまう。1719年6月10日グレンシールで相まみえた両軍であるが、政府軍は900の歩兵と120の竜騎兵、4門の迫撃砲小隊からなり軍備の点でキース軍を圧倒していた。戦いは3時間ほどで決着がつき、キース軍は政府軍によって制圧されてしまった。



Glen Shiel の古戦場を示す標識


Jacobite Rising of 1745 — 1745年のジャコバイトの乱

ジェームズ2世の孫、若干25歳のチャールズ・エドワードによって引き起こされた最大、最終のジャコバイトの乱。前年に英国進攻のチャンスを逃しその情熱を失っていたルイ15世からの十分な軍事援助を、ジャコバイトは期待することができない状況下、アイルランド・ジャコバイトのオサリバン大佐の助けもあって、野砲20門、3,500丁の銃器、2,400振の剣、4,000ル



Charles Edward

イドール(仏金貨)、及び700の軍勢をチャールズは集めることができた。64門の砲を備えた大型軍艦エリザベス号に兵員と軍需物資を載せ、7名の従者と共に小型フリゲート艦ラ・デュテュイエ号に乗りこんだチャールズは、1745年7月16日英国に向かって出帆した。不運にも哨戒中の英国軍艦ライオン号に遭遇し、戦闘による破損によりエリザベス号は物資を積んだままフランスに戻らざるを得なかったが、チャールズは7月25日、念願のスコットランドに上陸を果たした。スコットランド上陸後、チャールズがハイランドの族長に挙兵を願う手紙を送った結果、8月19日シール湖畔グレンフィナンでチャールズ軍の旗挙げに集まったのは1,200名のハイランダーであった。彼らは政府軍駐留の

フォート・ウィリアム、フォート・オーガスタスを迂回し、コリィヤリック峠道を逆上り、パース、スターリングを通りその間に軍勢を増加させ、9月17日無血のうちにエディンバラ入城を果たした。チャールズはエディンバラのホリールード宮殿において、父ジェームズ・エドワードをイングラ



スコットランドに上陸したチャールズ



チャールズ軍の勢いは止まらず、9月21日エディンバラ近郊プレストンパンズでスコットランド守備軍総司令官コープ将軍率いる政府軍を壊滅させ、スコットランドに橋頭堡を築いたのである。フランスはただちにジャコバイトと同盟条約を結び、10月



Prestonpans

9日から19日にかけて大砲や食料を4隻の輸送船でチャールズのもとに送り込むことに成功した。一見順調にみえた蜂起であったが、ハイランダーは「氏族」ごとには統率のとれたものであったが、すべての「氏族」が互いに友好的であったわけではなく、ジャコバイト軍全体としての統制には問題があった。ハイランダー達が政府軍を倒すという共通の目的で結び付いていた以上、チャールズは軍を常に進撃させなければならなかった。11月1日スペインからも軍資金と兵が届き軍勢が5,000にふくれあがったチャールズは、無謀にもフランスとの連携を待つ間もなく、約束されたイングランド・ジャコバイトによる蜂起を

期待して、ロンドン進攻を始めてしまった。エディンバラから南進したチャールズ軍は怒濤の進軍を続け、11月18日にはカーライルを、11月29日にはマンチェスターを陥落させながら軍勢を増強していった。12月4日ロンドンまであと200kmのダービーを陥落させると、ジャコバイト軍前進の異常な早さはロンドンをパニックに落とし入れ、国王ジョージ2世は故国ハノーヴァーへの逃避も考えなければならなかったという。



最南下地点を示す記念碑

その勝利を確実にするため、フランスではルイ15世の英国進攻の命を受け、リシュリュー公爵が15,000のフランス兵をチャールズの援軍に早急に集結させている最中でもあったのである。しかし、頼みとしたイングラ

ンドでの蜂起は皆無であった。バリモア伯爵らイングランド・ジャコバイトはチャールズのスコットランド挙兵以後、フランス宮廷に何度も要請し、もし10,000のフランス軍が英国に上陸すれば、30,000のイングランド・ジャコバイト軍勢が蜂起することを約束していたが、その情報はチャールズのもとには届いていなかった。ジャコバイト軍進撃のあまりの早さにフランス軍の援助の準備が追いつかず、そのフランス軍の英国上陸の遅れがイングランド・ジャコバイトの決起に躊躇を生じさせ、それがチャールズ軍の判断を誤らせることになった。急速、大陸からカンバランド公爵が10,000のオーストリア継承戦争大陸派遣軍を引き連れ戻ってきたこと、背後に政府軍がウェード元帥に率いられ迫っていたことなど、チャールズ軍には不利な情報ばかりが届いた。そのうえ、兵站線も伸び過ぎ、村々でのイングランド人の非協力的な態度に兵への食料の供給もままならないような状況下、風雪のなか冬を迎えるよりは戦線の立て直しに一時スコットランドに退くという意見が軍議で強く主張されるようになった。

一時退却を推したのは軍の実質的指揮官のマリ卿であったが、フランス軍の様子が一向に不明であった情勢を鑑み、チャールズはやむなくこれを受け入れざるを得なかったのである。この時、フランス軍は指揮官リシュリユー公爵のもと英国進軍の命を待ってブローニュに集結していたが、その届いたのはチャールズ軍退却のニュースであった。フランス軍は出陣

四一三



Bonnie Prince Charlie,
by John Pettie



12月26日にグラスゴー、さらにはスターリングに戻ったチャールズ軍には増援部隊が駆けつけ—その中には約束された軍勢の10分の1ではあったがルイ15世の派兵した1,100名のフランス軍も含まれる—その勢力は8,000を数えた。1746年1月17日にはウェード将軍の後任ホーリ将軍率いる政府軍をファルカークで打ち破ったチャールズは、この機にも背後に迫る政府軍本隊カンバランド軍を迎え撃つことなく、マリ卿の意見に従ってハイランダーの地インヴァネスに陣を敷きそこで冬を越すことを選ぶ。この頃のジャコバイト軍は14,000を誇ったのに対し、カンバランド軍は増強された分を含めて9,000に過ぎなかったことは、チャールズの耳には届いていなかったのである。3月にはマリ卿によるいくつかの小競り合いの結果によって数百名の捕虜を得るほどジャコバイト軍は戦術上政府軍を圧倒しており、援軍も増え続けていたが、チャールズは総決戦の時期を先延ばしにした。モンローズで奪取した政府軍小型砲艦ハザード号をプリンス・チャールズ号と改名してフランスに急派し、15,000ポンド(現在の価値に換算すると約1億2千万円)の金貨と最新の銃器と十分な火薬を装備した一個大隊を載せ戻ってくるのをチャールズは待ち望んでいた。しかし、このプリンス・チャールズ号は3月25日、政府軍に拿捕され、ジャコバイトの優勢は一気に覆されてしまう。軍資金の欠乏はチャールズ軍から士気を奪い、かわりに飢えを与えることとなった。



チャールズ・エドワードの騎馬像

時が過ぎるにつれて軍を離れる兵が増えていき、このままでは1715年の乱と同じく軍の実質的解体は火を見るより明らかであった。残った兵士達も寝る間も惜しんでわずかな食料調達を行なっていたため、慢性的空腹と睡眠不足に悩まされており、倦怠感がジャコバイト軍に蔓延していった。一方、着々と決戦に備えたカンバランド軍は、ジャコバイト軍の隙を衝

き4月8日にアバディーンを
 発ち、その6日後にはインヴァ
 ネス近くのネルンに到着した。
 チャールズが気付いたときには、
 両者の対決はもはや回避



できないほどの距離になっていた。軍議も十分に行う時間も無く焦った
 チャールズは、副官オサリバン大佐の意見を聞き入れ、決戦の地を両軍の
 間にあるカロデン・ムーアに定めカンバラントに伝えたが、オサリバンは
 もともと軍の主計畑一筋で戦闘経験のほとんどないアイルランド人であつた。
 チャールズ軍の実質的指揮官マリ卿が後に、「カロデンほどハイラン
 ダーにとって戦いにくい地はなかったであろう」と述懐するように、ハイ
 ランダーに馴染みのない大砲や騎兵に都合のよい平坦な地であつた。カ
 ロデンを視察したカンバラントは翌日に戦闘を控えながら、「地の利、我
 にあり」として4月15日の自らの25歳の誕生日を盛大に祝つたのであ
 る。この夜、ジャコバイトの軍議のなかでマリ卿からひとつの提案がなさ
 された。戦い前夜のジャコバイト全軍の兵による、カンバラント軍の野营地
 への夜襲である。急仕立てのこの作戦では、この地方に住むマッキントッ
 シュ氏族が案内役に選ばれたが、彼らはカロデンを熟知していたわけでは
 なかった。また、行動を共にしたフランス正規軍は夜間行軍の経験がほと
 んどなく、全くの足手まといになり進軍は鈍かつた。空が白み始めたとき、
 ジャコバイト軍はいまだ敵陣3km手前の地点にあり、マリ卿はやむ
 なく全軍を引き返せざるを得なかつた。翌16日、午前11時に対峙した
 両軍であつたが、カンバラントが休養十分な6,400の歩兵と2,400の騎兵
 を擁したのに対し、チャールズの下には前日の配給がビスケット1枚で夜
 間に泥炭地を無為に歩き回され、一睡もしていない疲弊した5,000の兵し
 か残っていなかつた。カンバラント軍の10門の3ポンド砲が砲兵戦の経
 験のないチャールズ軍の前線に、また6門の臼砲が後方に向け火を吹いた
 時、勝敗はすでに決していた。チャールズ軍もフランスから届いた砲、押

収した砲合わせて 12 門所持していたが、熟練した砲手は皆無であった。砲音が止むと銃、剣、斧を持つハイランダーに騎兵が切り込み、この日のために用意された葡萄弾 (9 つの玉が飛び散る散弾) や新型のマスケット銃 (ライフルの前身) からの銃弾が雨霰のように降り注いだ。戦闘は小一時間ほどで終了し、チャールズは逃げるように戦いの地を後にするしかなかった。



*The battle of Culloden,
by Luke Sullivan*



Jacobite Rose — ジャコバイト・ローズ

ジャコバイトの象徴であった白バラ。品種はロサ・アルバ (Rosa alba) で Bonnie Prince Charlie's Rose の別名を持つ。バラ戦争で戦ったヨーク家の白バラともいわれている。白いリボンで形付けられたジャコバイト・ローズを表したものがジャコバイト兵の帽子に飾られた。1999 年に復活したスコットランド議会に出席したスコットランド国民党の議員の胸には白薔薇が付けられていた。



ジャコバイト兵の帽子に飾られたジャコバイト・ローズ



Jacobite Standard, 1745 — 1745 年のジャコバイト戦陣旗

1745 年のジャコバイトの乱で用いられた、中が白抜きの赤い絹で作られた旗。白抜きの部分には、TANDEM TRIUMPHANS (永遠の勝利を) の金文字が刻まれた。写真は 1745 年協会によって復元されたもの。



Jacobite Toasts — ジャコバイト達の乾杯

1745年のジャコバイトの乱以降、ジャコバイトへの取締りが強化された。ジャコバイトたちは身内の晩餐で乾杯するときは、ヨーロッパ大陸にいるジェームズ2世の子孫を讃え「海のかなたの国王(The King over the Water)へ」と、また公の場では乾杯するグラスをウォーターグラスやフィンガーボウルの上を通して「国王へ」と発声した。



James II (1633-1701) — ジェームズ2世

チャールズ2世の弟。7歳の時にピューリタン革命が勃発し、1660年の王政復古までフランスに亡命する。フランスでは軍籍に身を投じ、ヨーロッパ各地を転戦した。王政復古後イングランド海軍を創設し、海軍総司令官として英蘭戦争で活躍する。チャールズ2世に嫡子がいなかったため、1685年、英国国王に即位する。1688年の革命で王位を追われ、フランスに亡命した。



James Francis Edward Stuart (1688-1766) — ジェームズ・フランシス・エドワード

ジェームズ2世の長男で、1701年父王の崩御を受けてイングランド国王ジェームズ3世及びスコットランド国王ジェームズ8世と宣した。1708年及び1715年の乱では英国に上陸したが、時機を逸しフランスに戻る。1719年にポーランド王の孫と結婚し、2人の息子をもうけた。生涯カトリックを通し、1766年ローマで死去した。



K

 **Keith, George, 10th Earl Mariscal (1690-1778)** — 第10代マリシャル伯爵、ジョージ・キース


スコットランド出身の軍人で外交官のジャコバイト。1715年のジャコバイトの乱に参加後、アヴィニョンの亡命ジャコバイト宮廷で、スペイン大使となる。1719年のジャコバイトの乱ではスペイン軍を率いて出陣するが、嵐のため艦隊を失う。その後、プロシアのフリードリッヒ2世に仕えた。



 **Keith, James Francis Edward, Field Marshal (1696-1758)** — ジェームズ・キース陸軍元帥


スコットランド・ジャコバイトのマリシャル伯爵の弟、1715年及び1719年のジャコバイトの乱に参加した。19年の乱敗北後はスペイン陸軍の大佐として活躍の後、ロシアで連隊指揮官として卓越した才を発揮し、1747年フリードリッヒ2世に請われプロイセン陸軍元帥となるが、7年戦争の中で戦死する。



 **Keppel, George, 3rd Earl of Albermarle (1724-1772)** — 第3代オーベマール伯爵、ジョージ・ケッペル

職業軍人で後に政治家。カンバランド公爵に仕え、カロデンの戦いの勝利をジョージ2世に伝えた人物。1746年から1754年まで下院議員を務める傍ら、近衛騎兵連隊大佐から、将軍にまで上り詰めた。祖父はウィリアム3世の愛人であったアーノルド・ヨーストで、1754年に父から伯爵位を継いだ。



 **Louise de K roualle, Duchess of Portsmouth (1649-1734)** — ルイー
ズ・ケロワール

ブルターニュ貴族の娘で、ルイ 14 世の義妹ヘンリエッタ・アンの侍女であった。1670 年ヘンリエッタについて英国に渡り、後にチャールズ 2 世の愛人になるが、フランスからも年金を受けていたため、イングランドでは人気は薄かった。チャールズ 2 世死後は、フランスに戻り、フランスのオルレアン公ルイ・フィリップの庇護を受ける。



 **Killiecrankie, Battle of** — キリ克蘭キーの戦い

ダンディ子爵率いるジャコバイト軍と政府軍との戦いで、1689 年 7 月 27 日に起こった。ウィリアム 3 世の即位に反対する 3,000 名のスコットランド・ジャコバイトは、キリ克蘭キーで 4,000 名の政府軍に相対した。ダンディ子爵の指揮の巧みさもあって、ジャコバイト軍 600 名に対し、政府軍から 2,000 名以上の戦死傷者を出す大勝利であったが、ダンディはこの戦いで斃れた。



 **Kilmuir** — キルムイ

スカイ島北西の海岸。1746 年のカロデンの戦い敗北後のチャールズ・エドワードの逃避行を助けたフローラ・マクドナルドの墓がある。フローラはチャールズを女装させ自分のメイドとして追っ手をかわした。チャールズは半年近く逃亡を続けた末、無事フランスに戻った。フローラは捕らわれ一時ロンドン塔に収監され、アメリカに移民として渡る。6 年後にスコットランドに戻り、スカイ島で暮らした。



 **Kilravock Castle** — キルラボック城

ネアンとインヴァネスの間に位置する 15 世紀
 建立の城。1746 年のカンバランド公爵とのカロ
 デンの戦い前夜、チャールズ・エドワードはこ
 の城に 4 日間滞在してもてなしを受けた。



 **Kilt** — キルト

タータンの布を腰に巻き、ベルトやピンで留めるハイ
 ランダーの衣装。1746 年のカロデンの戦い後、英国政
 府は氏族の解体のため、戦闘着でもあったキルトを、
 第 42 ハイランド連隊を除いてその着用を禁じたが、
 1782 年に再び使用が許された。現在でもスコットラン
 ド連隊の兵士は、キルトを常装している。



 **Kilt Sporrans** — キルトスポラン

キルトにつける物入れ。キルトにはポケットがなかったの
 で、ハイランダーはこれにお金をはじめ、必要なものを入
 れていた。スポランは、ゲール語で財布を意味する。



 **Kinlochmoidart House** — キンロックモアダートの館

スコットランド、ハイランドのマクドナルド氏族の居城。1745 年 7 人の
 従者と共にスコットランドに上陸した
 チャールズ・エドワードは、8 月 11 日
 から 17 日までこの館に滞在し、挙兵を
 願う手紙を作成した。館はカンバラ
 ンド公爵に燃やされるが、19 世紀に再建
 された。



Kinsale — キンセール

アイルランド南部の港町。1689年3月12日ジェームズ2世は王位奪還のため、ここに上陸してウィリアム3世との戦いに臨んだ。



James II Landing at Kinsale

Kyle of Tongue — トンの浅瀬

スコットランド北西ハイランドにある浅い入り江。1746年、フランスから15,000ポンド(現在の価値に換算すると約1億2千万円)の金貨と最新の銃器と十分な火薬を装備した一個大隊を載せジャコバイトに送られたプリンス・チャールズ号が、2月25日政府軍に拿捕された場所。これ以降、ジャコバイトの優勢は一気に覆されてしまった。



The Prince of Orange, William III, Embarked from Holland, and Landed at Torbay, November 4th, 1688, after a Stormy Passage, by William Turner

L

La Rocca — ラロッカ

ローマ近郊、フラスカティ司教の館。チャールズ・エドワードの弟、ヨーク公爵枢機卿ヘンリが 1761 年から、亡くなる 1807 年まで居住した館。



Lally, Arther Thomas, Earl of Moenmoyne (1702-1766) — アーサー・トマス・ラリー

アイルランド人のジャコバイトで、フランス軍人。1745 年のジャコバイトの乱では、自らの連隊を率いてチャールズ・エドワード軍に加わり、ファルカークの戦いではチャールズの副官を務める。カロデンの戦い後フランスに戻り、1755 年には陸軍中將に昇進した。



Lancashire Regiment — ランカシャー連隊

現在は英国第 47 歩兵連隊で、1741 年に組織され 1745 年のジャコバイトの乱でのプレストンパンズの戦いが初戦であった。その後エディンバラ城の防衛隊に編入され、城をジャコバイトの手から守った。



Layer, Christopher (1683-1723) — クリストファ・レイヤー

法律家で、名うてのイングランド・ジャコバイト。アタベリ陰謀の主要加担者で、1721 年、チャールズ・エドワードに英国進攻を説いた人物。愛人の裏切りにより、1723 年に腹裂き、四肢切断の刑で処刑された。



 **Leanach Cottage** — レアナッハ小屋

1746年のカロデンの戦場にある農家小屋。政府軍とジャコバイトはこの納屋の中、また壁沿いで激しく戦った。現在はスコットランド・ナショナル・トラストが管理している。



 **Charles Lennox, 1st Duke of Richmond and Lennox (1672-1723)**

— 初代リッチモンド、レノックス公爵、チャールズ・レノックス

チャールズ2世とルイーゼ・ケロワールの子。チャールズ2世の下では1681-85年に主馬頭 (Master of the Horse) を務めた。1688年の革命後ウィリアム3世に忠誠を誓い、1693-1702年までウィリアムの副官となり、1701-05年にはスコットランド担当海軍大臣に任じられた。



 **Lindsay, John, 20th Earl of Crawford (1702-1749)** — 第20代クロ

ウフォード伯爵、ジョン・リンゼー

スコットランドの貴族で、軍人。1733年、皇太子付き御寝所係官に就任後、1739年スコットランドに Black Watch (黒い監視兵連隊) が組織されると、初代指揮官に任じられた。その後ヨーロッパ大陸で戦功をあげ、1745年のジャコバイトの乱では、准将として兵を率いた。



 **Linlithgow Palace** — リンリスガウ城

エディンバラ近郊にあるスコットランド国王の居城。スコットランド女王メアリはここで誕生した。1745年チャールズ・エドワードが南進の際この城に立ち寄り、1746年カンバランド公爵軍により城の大部分が破壊されたが、19世紀に再建された。



 **Little Gentleman in Black Velvet, The** — 黒いベルベットを纏った小さな紳士

騎乗の馬がモグラ塚に足を取られ、落馬が原因で亡くなったウィリアム3世を皮肉り、初期のジャコバイトの乾杯の音頭に使われた。

